

記念講演

ふたりのファニー

——新世界を旅する物書きのイギリス女性たち——

大井 浩 二 関西学院大学名誉教授
司会 馬場 美奈子 関西学院大学名誉教授

馬場 みなさま、こんにちは。ご無沙汰しておりました。今日は英文学科創設 80 周年記念というおめでたい機会に、大井浩二先生の特別講演を伺うことができますことを大変幸いだと思っております。みなさん良くご存じのように、先生は長い間、非常に幅広く、多様なジャンルのテキストを取り上げられて、それらを精密に考察されたアメリカ文学・文化研究の成果を続々と発表、出版してこられました。昨年の秋にも『エロティック・アメリカ』と題しまして、これまでのアメリカ研究がなおざりにしがちだったアメリカ文化のエロティックな側面に光を当てた、大変啓発的で目から鱗が落ちるご本を出版されたばかりです。今日のご講演では趣をお変えになりまして、「19 世紀前半のイギリス女性たちが当時の若いアメリカをどのように捉えたか」というテーマについてお話させていただきます。先生のご関心の 1 つであろうと思われる、忘れられた女性作家たちの作品の研究の一環であり、また先生の前著『旅人たちのアメリカ』の続きになるのではないかと期待しております。大井先生、どうぞよろしく願いいたします。

大井 馬場先生、どうもありがとうございました。

今日、ここで「何かしゃべれ」ということで、何がいいか大分考えたのですが、アメリカ文学だけの話では聞き手の方も困るだろうということで、大西洋の両側でという話になればと思って、このテーマを選びました。新世界はもちろんアメリカを指しています。Frances Wright という女性、通称

“Fanny”です。それからもうひとり、Frances Trollope。こちらがもっと有名ですが「ふたりのファニー」ということで、タイトルに挙げさせていただきました。このふたりの女性の話をするにあたって、タイトルに「物書きの」という言葉を入れてあります。これは *The Scarlet Letter* の Nathaniel Hawthorne が、ベストセラーを次々に書いている女性作家たちをいわば軽蔑的に “a damned mob of scribbling women”（物書きの女ども）と呼んだのに引っかかっています。そのような物書きの女どもにも結構アメリカを見る目があつたのではないかというつもりで「物書きの」という言葉をあえて入れたような次第です。

まず、Frances Wright の *Views of Society and Manners in America* が 1821 年に出ますが、これはアメリカを賛美するような内容の旅行記になっています。James Fenimore Cooper というアメリカの小説家がありますが、この人が「鼻持ちならないほどのお世辞だ」「アメリカをべた褒めにしすぎている」と批判しています。それに対してもうひとりの Fanny の本は *Domestic Manners of the Americans* というタイトルです。この本は非常に辛口といえますか、苦いアメリカのイメージを描いて有名です。去年たまたま Sara Wheeler という人が *O My America!* という本を書きまして、僕は最近まで知らなかったんですが、その中に Trollopize という単語が出てきます。これは “to abuse the American nation” という意味で使われている、と著者は指摘しています（資料 1 参照）。念のために OED を引きましたけれども出てこないのですが、Trollope の名前は「アメリカの悪口を言う」という動詞になって現在に残っているんですね。ついでに申しておきますと、タイトルの *O My America!* は、イギリス文学をやっている人はご存じの John Donne という詩人に “To His Mistress Going to Bed”（ベッドに入ろうとしている愛人に寄せて）という有名な詩がありますが、その中で自分の恋人に “O my America, my new-found-land” と呼びかけているところからきている言葉です。

もう 1 つ、*Views* と *Domestic Manners* の両方に “manners” という言葉が使われています。日本語に訳しにくい言葉ではありますが、どう

いう意味で使っているのか両方の作品を読んでもよく分からない感じが残ります。当時、他にも2, 3冊同じような題名のアメリカ旅行記があって、例えば Thomas Hamilton が *Men and Manners in America* (1833) を書いていますし、フランス人の Michel Chevalier も *Society, Manners and Politics in the United States* (1839) を書いています。どうも現在の我々としては、“manners” を “culture” と言い換えていいのではないかと思います。文化人類学的な意味での “culture” という使い方は 19 世紀前半にはなかったと思われますし、今の我々であればきっと “Culture and Society” というような言い方をするのではないのでしょうか。いずれにせよ、この “manners” の意味にあまりこだわる必要はないと思います。

これから本論に入りますが、Frances “Fanny” Wright はあまり有名でないので、この年若い方の Fanny に重点を置いて話を進めることにします。

Frances Wright は今話題のスコットランドの生まれです。早くに両親を失ったりして子どもの頃は苦労したようなところもありますけれども、彼女が 16 歳の時に運命を変える出来事が起こります。イタリア人の Carlo Botta という歴史家が 1809 年にアメリカの独立戦争の歴史を書いています。この本を彼女は出版された直後ぐらいに読みます。当然イタリア語で読みましたが、この中に「アメリカは自由の国である」と書かれていました。当時、彼女は窮屈なイギリスに住んでいたものですから、「アメリカは自由の天地だ」と強い憧れを抱きます。Carlo Botta の本は今から思えば大した内容ではないと言われているが、アメリカの独立宣言書を書いた第 3 代大統領 Thomas Jefferson が、1817 年に John Adams に宛てた手紙の中で、「今、Botta の本を読んでいる。非常にいい本だ」と言っていますので、我々の主人公は Jefferson よりも前に原語で読んでいたのではないかと想像されます。そして、憧れのアメリカにどうしても行きたいということで、1818 年、23 歳の時に、非常に仲良しの Camilla という妹と一緒にふたりだけでアメリカに渡ります。リバプールから Amity 号という船に乗って出かけ、1818

年から 1820 年まで 2 年弱の間にアメリカ各地を見物して回り、その印象をスコットランドにいる遠縁の女性への手紙という形で書いた *Views of Society and Manners in America* を 1821 年に出版しました。これには 28 通の手紙が収められています。手紙の形でアメリカのことを外国に知らせるといのは当時よくあったことで、Crevecoeur の *Letters from an American Farmer* (1782) という有名な本はアメリカ便りの典型と考えていいと思います。

1821 年に出版された *Views* は、先に触れたように「胸が悪くなるほどのお世辞だ」と非難されたんですが、Fanny は早くからアメリカを訪れたいと思っていたのであり、彼女が一人称ではなく三人称で書いた自伝では、アメリカを見ることが自分の密かな夢になったと述べています(資料 2 参照)。彼女はまた、*Views* が出て 10 年足らず後に書いた文章(講演集の序文)の中でこうも言っています。「アメリカへ行くと至る所から “all men are created equal” で始まる独立宣言が聞こえてきた」ので、「どこを見てもアメリカというのは理想の世界だ」という一種の色眼鏡でアメリカを見ていた。だから、周りから「べたべたしたお世辞の文章だ」と言われることになったんだろう、と反省しています(資料 3 参照)。*Views* にはまた「アメリカは非常に平和な世界である」とか、「勇敢な世界である」とかいった褒め言葉がいっぱい並んでいます。「アメリカは自由を求める素晴らしい国である」とも(資料 4 参照)。彼女はここで “amity” という言葉を使っていますが、彼女の乗ってきた船が Amity 号だったと言い立てるのは読み込み過ぎかもしれません。ついでながら、映画 *Jaws* に出てくる島の名前は Amity Island です。Amity は “friendship” という意味ですから、友情の島にああいう恐ろしい怪物が出てくるというわけです。

Views の著者はまた、「アメリカはユートピアな世界である」とまで言い出します。アメリカは理想の国であるなどと言ったりしたりしたので、Cooper に叩かれることになったのです。ところが、*Jaws* の Amity Island に怪物的なサメが出現したと同じように、ユートピア的なアメリカにも大変なものが存在する。つまり「奴隷制度」が存在するというところに Fanny は

ようやく気付きます。それまで彼女は奴隷制度のことは考えてもいなかった。ところが「この奴隷制度はアメリカ歴史の汚点である」とか「奴隷制度は悪である」とかいった言葉が、*Views* を読み進めるうちにはっきりと聞かれるようになります。そして、奴隷の人たちの姿を見ていると、これは特にワシントン D.C. での彼女の印象ですけれども、「非常に自由な風が吹いているところに、非常に不純な匂いがしてくる感じがする」（資料5参照）と書きつける彼女は、奴隷制度を何とかしないといけないと考えます。この本の最後は、その当時の第5代大統領 **James Monroe**（直接名指しされてはいませんが）の「アメリカから奴隷がいなくなる日は遠くないだろう」という言葉で終わっています（資料6参照）。これが後に彼女をもう一度アメリカに呼び寄せることになるキーワードだったと言われています。

それまでイギリスではアメリカにそれほど大きな関心が払われていなかった。「自分たちの国から独立した（今のスコットランド問題みたいなですね）植民地ではないか」というわけです。この *Views* という本は、アメリカのユートピア的な面を紹介したということで人気を博します。例えば、有名な **Jeremy Bentham** という哲学者がいますけれども、この人も彼女を非常に高く評価します。それだけではなくて、アメリカ独立戦争のヒーローだった **Lafayette** というフランス人は、ワシントンと一緒に戦った戦友とも呼ぶべき人物ですが、彼女の本に非常に感激します。そして26歳の **Frances Wright** を自分の屋敷に招くわけです。彼女は **Lafayette** に気に入られ、最近では、どうも彼女は **Lafayette** の愛人だったのではなかろうかという説もあります。しかし、**Lafayette** の家族が猛反対をして結婚を許さなかったとも言われていますし、**Fanny** が彼の「養女にしてほしい」と申し出たというエピソードも残っています。**Fanny** の標準的な伝記を書いた **Celia Morris** は、「愛人でありながら養女になるというのは incest の匂いがする」とコメントしています。余計なことですけれども、**Lafayette** と **Frances Wright** は誕生日が同じでした。彼は1757年9月6日生まれで、彼女は1795年9月6日生まれ。誕生日が同じということもふたりを急速に接近させる要素だったのではないかということです。

1824年に **Lafayette** は「久しぶりにアメリカに来ないか」という招待を受けます。**Fanny** の本が出てから3年後のことですが、アメリカを再訪した彼は熱烈に歓迎されます。その歓迎委員会のメンバーに **Fanny** の悪口を言った **Cooper** もいました。**Fanny** は **Lafayette** と同じ船でアメリカへ行ききたかったのですが、またしても **Lafayette** の家族が猛反対をしたので、一便遅らせて妹と一緒にアメリカへ行き、アメリカに着いてからは彼と行動を共にしています。この時の彼女は **Views** の最後にあったように、奴隷制に対して「何とかしなければ」という気持ちがあったので、積極的に南部をたずね歩きます。第3代大統領 **Thomas Jefferson** や **James Madison** 前大統領に会ったりして、奴隷制をどうすればいいかというアドバイスを受けるわけです。そして、翌1925年にアメリカの奴隷制度を徐々に廃止するための計画を記したパンフレット *A Plan for the Gradual Abolition of Slavery in the United States* を出版して、その冒頭で「このまま放置しておくともアメリカは分裂の危機を迎えるだろう」「そして流血の騒ぎになるだろう」と、何年か後に起こる南北戦争を予想するかのような発言をしています（資料7参照）。そして、彼女は計画通り奴隷制度廃止を実行しようと考えて、そのパンフレットを **Jefferson** に送ります。**Jefferson** はもうよぼよぼになっておりまして、「片足を棺桶に入れて、もう片一方もそれに続いていこうとしている状態なので、積極的に何もできない」けれども、「奴隷制度廃止は決して不可能ではない」し、「そのためにはありとあらゆる手段を講じる必要があるだろう」と彼女の背中を押すような発言をします（資料8参照）。これは **Fawn Brodie** による **Jefferson** の伝記に出てくるエピソードですが、この言葉に力づけられた彼女は、やがて第7代大統領になる **Andrew Jackson** の所へ行って、**Jackson** が先住民から取り上げていた土地の一部、2000エーカーの土地を手に入れます。メンフィスからそう遠くない **Wolf River** と呼ばれる川のそばにあり、**wolf** は先住民のチカソー族の言葉で **nashoba** と呼ばれていたため、彼女はこれから作ろうとする奴隷解放のためのコロニーをナショバと名づけます（ナショバに関する詳細な説明は省略しますが、ネット上でいくらかでも情報を得ることができます）。

Fanny は元々アメリカをユートピアと思っていたわけですが、そのユートピアをユートピアでなくしていると彼女が考える奴隷制を排除して、完全なユートピアとしてのアメリカを実現したい。そのために奴隷たちを教育して、その人たちを外国へ、例えばハイチやリビアに送り込もうと考えたのです（資料9参照）。当時、**colonization** と呼ばれる、黒人奴隷をアメリカから国外に移住させて、黒人奴隷のいないアメリカを作ろうという動きがあって、彼女はそれに乗っかっていたわけです。同時にまた、奴隷制を廃止しようという彼女の考えは、当時いくつかあったユートピア運動の流れをくむもので、ナショバは **Robert Owen** がインディアナで建設していた **New Harmony** というユートピア世界からヒントを得たと言われています。しかし、やがて経済的な問題が発生したり、ナショバ内部での男女関係をめぐるトラブルがあったりして、経営がうまくいかなくなっていく。ちょうどその頃、暑い南部の土地ですので、彼女は心身共に疲れ果てて病気になってしまっ、一旦ヨーロッパへ引き上げます。引き上げた時の病気に関して、ある伝記作者はおそらくデング熱か、マラリアだっただろう、と述べていますが、ともかく病気療養のために彼女はヨーロッパに一時帰ることになります。その彼女の留守の間にナショバは内部崩壊してしまっ、彼女は結局、計画を立てたのが1825年でしたから、3年後の1828年にナショバから完全に撤退します。30名前後の奴隷たちを監督に預けて、彼女自身は現場から姿を消すのですが、奴隷たちを放置するわけにはいかないので、2年後の1830年に、チャーターした船でこの元奴隷たちをハイチまで連れていきます。そして、彼女の依頼を受けたハイチの大統領は、彼らの生活の面倒を見ることを引き受けます。こうして、彼女としては、立派に責任を果たしたことになりますが、彼女の計画は失敗に終わってしまいます。彼女はかなりの遺産を受け継いでいたのですが、この計画のために少なくとも16,000ドルは使っただろうと言われています。Fanny はハイチへは旧知のフランス人の医者と一緒にきましたが、その男性の子どもを妊娠してしまいます。こうして、できちゃった婚をすることになった彼女は、やむを得ず相手の男性の本国フランスへ行き、そこでひっそりと身を隠すようにして子どもを産ん

でいます。

ここでやっともうひとりの **Fanny** が登場することになります。**Frances Trollope** は息子の小説家 **Anthony Trollope** ほど有名ではないので、知らない人もいらっしゃるかもしれませんが、最近、関学の国際学部の杉山直人先生による *Domestic Manners* の翻訳が出ましたので、そのあらましを知ることができます。このもうひとりの **Fanny** は **Fanny Wright** に説き伏せられてアメリカに渡ります。1827年のことですからナショバが崩壊する1年ぐらい前の話です。なぜ **Frances Trollope** はアメリカ行きを OK したのか。いろいろな説明がありますが、経済的に困っていたことが挙げられます。借金取りに追われていて、ある時などは家の裏口から逃げ出したというエピソードがあるくらいです。夫は弁護士ですけれども、あまり才覚のない弁護士で、夫婦仲もよくなかったようです。それでアメリカへ行って一旗揚げようか、と変な野心が働いていたとも考えられます。

実は、**Fanny Wright** は **Fanny Trollope** に接触する前に、著名な詩人 **Shelley** の未亡人 **Mary Shelley** に手紙を書いています。彼女をご存じの *Frankenstein* (1818) の著者です。父親の **William Godwin** はラディカルな思想家でありましたし、母親の **Mary Wollstonecraft** は *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) という本を書いているので、**Fanny Wright** はその影響をかなり受けていたと言われています。それで、1827年8月、**Mary Shelley** に「自分はこういうことをナショバでやっているんだけど、ぜひ一緒に行ってもらいたい」と手紙を書きますが(資料10参照)、**Mary Shelley** は子どもを育てる必要があるという理由で断ります。ついでながら **Mary** の母親の **Wollstonecraft** は **Godwin** と結婚する前に、**Gilbert Imlay** というアメリカ人と同棲をしていて(ちょうどフランス革命の頃です)、1794年に **Fanny** という女の子を産んでいます。今日は **Fanny** だらけのお話になりますが、この **Fanny** は20歳前後で自殺しています。ところで、**Mary Shelley** に断られた **Fanny Wright** は、たまたま **Lafayette** の屋敷にきていた **Fanny Trollope** を説得し、**Trollope** もアメリカへ行ってみようかとい

う気になったわけです。

ふたりの **Fanny** は 1827 年 11 月 4 日に **Edward** 号で **London** を離れ、その年の 12 月 25 日、ちょうどクリスマスの日にはアメリカに到着します。その頃アメリカへ行くルートは大きく 2 つあって、1 つはニューヨークまで行くルートと、もう 1 つはミシシッピ川の河口にあるニューオーリンズへ行くルートです。**Wright** は最初のアメリカ旅行ではニューヨーク経由で行っていますが、今回の **Trollope** と一緒にの旅ではニューオーリンズからアメリカへ入りました。ナショバがミシシッピ州にありますからニューオーリンズから行った方が早いということです。**Trollope** と一緒に行ったのは息子の **Henry**, 16 歳です。ナショバで黒人を教育する仕事に就く予定でした。それから名前は挙げませんが 11 歳と 9 歳の娘のふたりです。後に作家になる **Anthony** はイギリスに残っていました。それにメイドや召使いも引き連れてあります。この頃、**Trollope** は 48 歳ぐらいだったと思いますが、もう 1 人、フランス人の 33 歳の **Auguste Hervieu** という青年を連れて行きます。この青年はフランスから亡命してきた画家で、**Trollope** 一家の居候みたいな身分だったのですが、画家ですのでナショバで絵の先生をやるという思惑を抱えていました。この **Hervieu** は後に *Domestic Manners* が出た時に挿絵を描いております。**Trollope** たちはアメリカであちらこちらを旅行して回りますが、変な若い男と一緒にだということで、上流階級の家パーティにはあまり招待されなかったのではないかとされています。

Wright と **Trollope** 一行は大変な苦勞の末にやっとナショバにたどり着きますが、その時の様子は *Domestic Manners* に詳しく記されています。そこは荒れ果てた土地で、「こういう所に人は住めないだろう」と **Trollope** は思い、“desolation” という言葉がいきなり頭に浮かんできた、と語っています（資料 11 参照）。大体、**Trollope** はアメリカに着いた時から、アメリカに対してよい印象を抱いていませんでした。「ミシシッピ川の風景は全然魅力的でない」「**Dante** がもしこれを見たら、もっとおぞましい地獄の世界を描いたのではなかろうか」とコメントしています（資料 12 参照）。そういう人ですからナショバの風景は幻滅どころの話ではなくて、「どうしてこん

な所で **Fanny Wright** は暮らしたがるんだろう」と思い始めます。Trollope は **Wright** を宗教的な狂信者みたいだと言っています。*Domestic Manners* の下書き (rough draft) が残っていて、その一部が Smalley 編の *Domestic Manners* に引用されていますが、そこに彼女は「この土地には牛乳もなければ飲み水もない。雨水だけを飲んでいる」とか、「とうもろこしパンはとも食べられたものではない」とか、「それを表現するには “desolation” という言葉がぴったりだ」とか、「にも関わらず、**Fanny Wright** はこの荒れ果てた風景の中でまるで征服者 (conqueror) のようにすっと立っている」などと書きとめています (資料 13 参照)。このナショバではとても暮らしていけないと言うんですね。息子に教師をさせようとか、Hervieu にも絵の先生をさせようとか、期待が大きかっただけに幻滅も大きかった。結局、10 日間この土地で過ごした後で、そこを離れることを決心します。Trollope は 300 ドルのお金を **Fanny Wright** に工面してもらって、そのお金でシンシナティに行くことになるのです。

これも余計なことで、こんなことを話していると時間がなくなりそうですが、Edmund White という現代作家に *Fanny* (2003) という小説があります。White はゲイの世界を描く作家として知られていましたが、何を思ったのか、この **Fanny Trollope** が **Fanny Wright** との交友を回想するという形の小説を書いています。タイトルの **Fanny** はふたりの **Fanny** を指しています。この小説では「自分はすっかり **Fanny Wright** に騙された」「**Fanny Wright** は独り者だからいいけれど、自分は子どもを何人も抱えた母親だから、こんな所にいることはできない」といった捨て台詞を Trollope が残したと書かれています (資料 14 参照)。そこには **Fanny Wright** の “bizarre utopianism” という言葉があったと思いますが、Trollope が「こんな浮世離れた、とんでもないユートピアとは付き合えない」と考えたのではないかと White は想像したわけです。こうして **Fanny Trollope** はナショバに別れを告げて、シンシナティに渡ることになります。後に残された **Fanny Wright** はどうだったかと言いますと、もう一度、先ほどの **Mary Shelley** に手紙を書いています。その手紙の中で、ナショバは「自分には

“住めば都”のようなもので決して嫌なものではない」「文明世界と全く変わらない快適さをこの土地に見つけ出している」と述べています。「人類の進歩と自由に対して献身的な情熱を持っていない人間には、この喜びは分からないだろう」（資料 15 参照）というのです。結局、Trollope は Wright のような献身的な情熱を欠いた人物だったと言い換えることができます。

それにしても、Fanny Trollope は何故シンシナティに向かったのでしょうか。詳しい説明はなされていないのですが、この土地が非常に豊かであるとか、繁栄しているという噂が彼女の耳に入っていたからです。その頃のシンシナティは西の果てに誕生した非常に大きな町で、“The Queen City”とか“The Queen of the West”とかいったニックネームが付いているぐらいですから、立派な町だったことは間違いありません。シンシナティに向かっていく時の気持ちを Trollope は “un voyage à faire, et Paris au bout!”（これから長い旅に出る。しかも目的地はパリだ!）と表現しています（資料 16 参照）が、シンシナティに行くのはパリに行くような喜びを感じさせるという意味のフランス語で、Rousseau の作品からの引用です。なお、Penguin 版の *Domestic Manners* の注釈者は、これを Rousseau の *Emile* (1762) からの引用としていますが、実際は *Emile* ではなく *Confessions* (1782) です。*Confessions* に登場する若者が喜び勇んでパリに出発する描写に、この “un voyage à faire” という表現が出てくるのです。

だが、喜び勇んでシンシナティに向かった Trollope たちを待ち受けていたのはとんでもない現実でした。イギリスからやってきた Frances Trollope が初めて経験する風景が目の前に展開していました。まず彼女たちを歓迎してくれたのは豚の群れでした。この豚は町の清掃係として放し飼いにされていたのです。当時シンシナティは養豚の盛んな町で、豚を放し飼いにすると片っ端から生ごみを食べてくれるのです。ですから、非常にありがたいと一方で言いながら、しかし、豚と一緒に暮らすのは大変なことでした（資料 17 参照）。しかも彼女がアメリカに着いて蒸気船に乗った時に、船の中のキャビンが汚くて仕方がない。こんなだったら豚と過ごした方がまだ、と文句を言っていたのが、シンシナティへきて、その彼女の予想が当たったとい

うか、実現したというか、豚のいる世界に放り込まれることになってしまうわけです。もうちょっと後になって、1840年代にイギリス作家の Charles Dickens がアメリカ旅行記を書いています、Dickens もまたニューヨークで豚が走り回っているのを見たということを書き残しています。Trollope の文章にある scavengers は「清掃係」という意味ですが、全く同じ言葉を Dickens も *American Notes* (1842) の中で使っています。

また、シンシナティに劇場が1つしかないことも、イギリスからきた Trollope にとっては大きな驚きでした。それに、観客のマナーがよくない。観客席に平気で背中やお尻を向けて座っていたりする(資料18参照)。*Domestic Manners* のイラストには男性の観客が両足の靴を手摺りにあげている様子が描かれています。こうしたマナーの悪さもタイトルの domestic manners は意味していると思います。そうした劇場の風景をわざわざ画家の Hervieu が描き、Trollope はこういう形でアメリカ人の悪口を言うわけです。なんたるマナーの悪さか、と。ところが、この Trollope の発言は波及効果が大きかったらしくて、その後、レストランや劇場で足をテーブルの上に乗せたり、手摺りにあげたりしている者たちがいますと、周りの人が“Trollope! Trollope!”と叫ぶようになり、悪いマナーの連中は逃げ出したというエピソードが残っています。

それから、アメリカで servants を探すのは一苦労だとも Trollope は記しています。アメリカは自由の国、平等の国であるので召使いとして雇おうとすると大変な反発をくらったというのです。自由な市民を召使いと呼ぶことは共和国アメリカに対する反逆罪になるという発言には、Trollope のアメリカ嫌いが顔をのぞかせています(資料19参照)。「自由、自由と言って、召使いもろくに雇えないのか」と彼女は反発をします。彼女の発言にある petty treason は小反逆罪・軽反逆罪という意味ですが(その反対は high treason です)、そういう大げさな言葉でアメリカをからかっているのです。このアメリカでは召使いを見つけにくいという全く同じ発言を、もうひとりの Fanny も *Views* の中でしていますが、そこではアメリカの女性が召使いになるのを嫌がるのは極めて自然なことであると書かれています(資料20

参照)。ここでふたりの **Fanny** のアメリカに対するアプローチの違いが明らかになってきます。「何が共和国だ」と思っている **Trollope**, 「共和国だから女性が召使いになりたがらないのは当然だ」と言う **Fanny Wright**。共和国アメリカに対する基本的な姿勢の違いがそこに現われていると思われま

す。

こういうふうには **Trollope** は事あるごとにアメリカの悪口を言います。シンシナティだけの例を挙げましたけれども、その後シンシナティを離れてアメリカ各地を旅行した時にも、同じ調子でアメリカの悪口を徹底的に書きます。そして、アメリカからイギリスへ帰った **Trollope** は、*Domestic Manners* を発表しますが、その本の最終章で、自分はアメリカ人もアメリカ人の考え方もアメリカ人のマナーも何もかも大嫌いだ、と書き（資料 21 参照）、さらにアメリカ人がもっと洗練されたら、ちゃんとした国としてヨーロッパに歓迎してやってもいい、といった上から目線の発言で、*Domestic Manners* を書き終えています（資料 22 参照）。そこには **American equality** に反発する **Fanny Trollope** の感情が露骨に表れているのです。

ふたりの **Fanny** の書き残した旅行記を大急ぎで見ましたが、ふたりは 1821 年に別れて以来、全然会わなかったかということ、そうではないのです。**Fanny Wright** はナショバを離れた後、**public speaker** になって、あちらこちらで講演会を開きます。そして **public speaker** として有名になりますが、当時女性が **public speaker** になるのは大変な冒険でした。つまり、女性は女性の領域に留まっていなければならない。男性のように女性が公の場で演説をしたりするのは、もってのほかの振る舞いだ。女性らしい女性は家庭の中に閉じこもっているべきだ、というのが当時の基本的な思想でした。ところが **Fanny Wright** はほとんど最初の女性の **public speaker** となり、しかも男女が入り混じった聴衆を相手にしゃべったというので大変な非難を受けます。周りから白い目で見られます。当時は “**Cult of True Womanhood**” という考え方が流行していて、この問題を論じた **Barbara Welter** の論文によりますと、外で演説をしたりする女はろくなものではな

い、と考えられ、Mary Shelley の母親の Mary Wollstonecraft とイギリスのラディカルな活動家だった Harriet Martineau と Fanny Wright の 3 人は (Mary Wollstonecraft の影響を受けた Fanny としては名誉なことだったかもしれませんが)、とてもまともな女性とは呼べないような “semi-women” で、“mental hermaphrodites” (精神的な両性具有者) だ、とある牧師が非難しているのです (資料 23 参照)。このような非難を Wright にもろにぶつけたのが Catharine Beecher です。彼女は有名な牧師 Lyman Beecher の娘であり、*Uncle Tom's Cabin* (1852) を書いた Harriet Beecher Stowe の姉でしたが、public speaker としての Fanny Wright を徹底的に批判しています。彼女に言わせると、男性に伍して人前でしゃべる Wright はとんでもない女であり、こんな女性らしくない、offensive で disgusting な女性を見たことはない、ということになります (資料 24 参照)。また、Fanny Wright が演説をしているところを描いたイラストでは、彼女はガチョウの姿をしていて、そのキャプションには彼女の名前をもじって “A Downwright Gabbler” (正真正銘のおしゃべり女) と書かれています。

その Fanny Wright が最初に演説したのが Fanny Trollope が住んでいたシンシナティだったのです。彼女は Trollope がシンシナティにいることを知っていたはずですが、偶然、この場所を選んだのかも知れません。いずれにせよ、彼女は 1829 年 8 月 10 日、17 日、24 日と日曜日に 3 回連続講演をしています。彼女の講演を Trollope は素晴らしいと褒め称えています (資料 25 参照)、ただ一個所 Jefferson を引用しているところがあったのが、気に入らないと言っています (資料 26 参照)。Wright は “All men are born free and equal.” という言葉を Jefferson のものとして使っていますが、この言葉は全くのインチキだと Trollope は言います。何故なら Jefferson は女奴隷たちに子どもをたくさん産ませているのではないかと、言って彼を非難しています (資料 27 参照)。Jefferson が女奴隷の Sally Hemings に 6 人の子どもを産ませたというのは有名な話で、この女性の子孫の DNA 鑑定をしたところ、間違いなく Jefferson の子孫であるということが明らかになっています。このスキャンダルが何故か Trollope の耳に入

っていたようですが、Fanny Wright と同じスコットランド出身の James Callender という男が、Jefferson は Sally という名前の黒人女に数人の子どもを産ませているという暴露記事を 1802 年 9 月に新聞に発表していました。この Callender を主人公にした *Scandalmonger* (2000) という William Safire の小説が 10 年ちょっと前に出ております。どうやら、その噂が Trollope の耳に入っていたらしく、それを根拠にして、Jefferson はそういう男だから “All men are born free and equal.” という言葉は全然信用できないと言って批判しています。さらに Trollope は *The Life and Adventures of Jonathan Jefferson Whitlaw* と題する奴隷制反対の小説を 1836 年に書いていますが、主人公の奴隷所有者のミドルネームをわざわざ Jefferson としています。Jefferson の名前を持ち出すことで、Jefferson を間接的に批判しようというのです。そういうわけで、彼女が嫌いな Jefferson の言葉を後生大事に演説の中で引用した Fanny Wright のことを Trollope は批判したのです。

Fanny Wright は確かに Jefferson のことを心から尊敬していました。10 代でアメリカ革命の本を読んで以来、Jefferson が草案を書いたアメリカ独立宣言は彼女にとってバイブルみたいなものでした。彼女の伝記を書いた Celia Morris は、彼女は “All men are created equal.” という言葉の men には women も含まれていると考えて、Jefferson を心から信頼していた、と語っています。Fanny Wright はまた演説の中で Jefferson は素晴らしいと繰り返し、彼の言葉は “golden words” であり、“immortal worlds” であると述べていますが、彼女の演説をよく読んでみますと、それはあくまでもジェスチャーであって、アメリカは Jefferson の理想を実現していないということを聞き手に訴えようとしていることが明らかになってきます。彼女が演説をしたのは独立から 50 年ぐらい経った頃なんですけど、50 年経った現在でも、アメリカは依然として Jefferson の夢を実現していない。これは、ユートピアだと思っていたアメリカに存在していた奴隷制度を批判するようになったのと同じ発想です。演説での彼女は、とりわけ女性問題についてアメリカを厳しく批判しています。いくら Jefferson が “All men are born free

and equal.”と叫んでも、女性が一段と低く見られているようでは、アメリカは決して立派な国にはなれない、と彼女は主張し、アメリカの女性を *mental chains* から解き放つことの重要性を説いています（資料 28, 29, 30 参照）。Fanny Trollope は、露骨に、ダイレクトにアメリカを批判していますが、Fanny Wright はアメリカが Jefferson の夢みたような素晴らしい国であることを認めながら、にもかかわらずアメリカは彼の理想を実現していない、とオブラートに包んだような形でアメリカ批判を展開しています。“All men are born free and equal.”という Jefferson の言葉を手掛かりにして、アメリカの女性が free でも equal でもないことを訴えているのです。独立宣言を信奉しているようなポーズを取りながら、建国以来ずっと女性問題を解決していないアメリカを批判するのが、Fanny Wright の基本的な戦略ではなかったかと思いますが、そのことを Fanny Trollope は見抜けなかったのかもしれません。

1848年7月、ニューヨーク州セネカフォールズでアメリカ最初の女性の権利のための会議が開かれます。この会議は *Seneca Falls Convention* と呼ばれていますが、その時に女性たちがいかに長い間男性によって虐待されてきたかを訴える文章「所信の宣言」(*Declaration of Sentiments*) が発表されます。その前文に、すべての男女は平等に創られている、と書かれているのは、“All men are created equal.”というアメリカ独立宣言の文言を書き直したもので、独立宣言の完全なパロディーになっています。このように Jefferson の独立宣言を踏まえながら、女性の置かれた悲惨な状況を訴えるのは、*public speaker* としての Frances Wright のそれと全く同じ手法です。Frances Wright は30年後に *Seneca Falls Convention* で彼女の後輩の女性解放運動家たちが用いることになる戦略を先取りしていたのではないかと考えられます。その証拠に、というのは変な話ですが、1881年から1922年にかけての長い時間をかけて、*History of Women's Suffrage* という、アメリカ女性参政権運動に関する何千ページもの本が編纂されていますが、その第1巻の最初に我々の主人公である Fanny Wright の名前が出てきます。Fanny Wright は女性解放運動のパイオニアだったということ

が解説されているだけでなく、この本の最初の口絵に彼女の写真が使われているのです。アメリカを代表する女性解放運動のヒロインとしての **Fanny Wright** の肖像画と考えていいと思います。**Seneca Falls Convention** で採用されることになる戦略を、20年以上も前に使っていた **Fanny Wright** に対するアメリカ女性たちの感謝の気持ちが、そこに表現されているのではないのでしょうか。

Fanny Wright は未だに十分に評価されているとは言えません。1852年に亡くなっていますが、晩年の彼女がかつての美貌はすっかり失われていて、現存する写真に写っている彼女は、若い時の巻き毛が辛うじて残っているにすぎない、といった哀れな状態です。夫にも娘にも背かれ、財産もほとんどなくなって、アメリカへ戻ってきて、57歳で亡くなっていますが、どこで亡くなったかと言いますと、それが何とシンシナティだったのです。ここでもまた **Frances Trollope** との繋がりが再確認できます。そして彼女が亡くなったのと同じ年に、奴隷問題を扱った *Uncle Tom's Cabin* が出版されていますが、それを **Wright** は早速注文したという記録も残っています。彼女としては自分が先頭を切って闘った奴隷制度のことを後輩の **Stowe** 夫人が書いたことを喜んでいたに違いないし、亡くなる4年前の1848年には先ほど触れた **The Seneca Falls Convention** も開かれています。ひょっとしたら彼女はこの会議のことは知らなかったかもしれませんが、彼女の墓石には「私は人類の進歩のために生涯を捧げた」という、1828年8月24日におこなった彼女自身の演説からとった言葉が刻まれています（資料31参照）。

Fanny Wright が忘れられた存在であることは、伝記作者の **Celia Morris** が指摘しているように、テネシー州メンフィスに立っている道路標識が雄弁に物語っています。このナショバの位置を示す標識には“Here, in 1827, a Scottish spinster heiress named **Frances Wright** set up a colony whose aims were the enforcement of cooperative living and other advanced sociological experiments. It failed in 1830.”と書かれています。1827年というのは正確には1825年です。彼女がナショバのコロニーを作った

のは奴隷解放のためだったという説明は一言も出てきません。**Slavery** の文字も **Black People** の文字もありません。彼女の実験の意図も成果も何も説明されていません。この標識は **Fanny Wright** がいかに無視された存在だったかということを示しているのです。これほどまでに無視されてきた彼女は、アメリカ史における“**untouchables**”のひとりだろう、と **Susan Kissel** という研究者は述べ、彼女は顧みられることはほとんどなかったし、たまに顧みられることがあったとしても間違った形で顧みられている、と指摘しています（資料 32 参照）。他方、もうひとりの **Fanny** は、*Domestic Manners* の著者として記憶されているだけでなく、著名な小説家 **Anthony Trollope** の母親としても文学史に名を留めています。彼女は *Domestic Manners* を含めて 6 冊の旅行記を書き、アメリカを舞台にした 4 冊の小説のほかに 30 冊の小説を発表しています。

ざっとふたりの **Fanny** の旅行記を振り返ってみますと、甘いアメリカのイメージを読者に示したのが **Frances Wright** で、苦いアメリカのイメージを示したのが **Frances Trollope** でしたが、どちらも基本的には奴隷制度を抱えたアメリカ、女性問題を抱えたアメリカを描いている点では変わっていないのではないかと。最初に述べたように、ふたりの **Fanny** のような物書きの女たちの書いた作品を、女性が書いた作品だからという理由で、無視したり軽視したりするのは決して正しいアプローチの仕方ではないだろうと思います。こうした忘れられた物書きの女性たち（僕が今考えているのは、もうひとりの **Fanny, Frances Kemble** というイギリス女性です）が発表したアメリカ旅行記を読むことで、あまり一般には知られていないもうひとつのアメリカのイメージを捉えることができるのではないかとというのが、本日の結論として申し上げたかったことです。

長い時間ありがとうございました。

馬場 大井先生、刺激的でたっぷりインフォメーションが詰まったお話をありがとうございました。私は先生が扱われました 2 人の **Fanny** の作品を大急ぎで取り寄せて読みました。2 人は違う見方をしている。でも 2 人とも

(当時まだ **Feminist** という言葉はなかったと思いますが), アメリカの女性は一旦結婚したら家から出られない, 教育もそれ以上受けないという, 女性の地位の低さに対する批判的な見解だけは共通していると思っておりましたが, そのあたりも非常に詳しくお話くださいました。何よりも, 扱う予定ですとおっしゃっていた **2冊**の (厳密には **3冊**になるんですが) 本に書かれた **2人**の印象に留まらず, そこからどんどん広がって, その後どうしたか, どう考えたか, 亡くなるころまでをご説明いただきました。お聞きしながら, 大井先生のお話を伺うといつもこうだなと, 先生は語り部でいらっしゃるなという印象も改めて持ったんです。何となく **19世紀**の女の人們たちがいる風景が浮かんでくるような感じが, 特に今日はいたしました。

大井先生は **2週間**後に開かれるアメリカ文学会の全国大会で招待発表をなさる予定でいらっしゃいます。大会資料を拝見しますと, 「**Hester Prynne**の妹たち」と題して, ほとんど忘れられた, あるいは知られていないアメリカ・ルネサンス期の女性作家たちの小説を取り上げ, それらのテキストが **Hawthorne** の *The Scarlet Letter* が終わったところから始まっているんだよ, ということを明らかにされるそうなんです。今日のご講演とアメリカ文学会のご発表と, **2つ**の異なるテーマを同時に考察なさる先生の研究意欲とバイタリティに感服いたしまして, 改めて敬意を表させていただきたいと存じます。同時に, 大変興味深くて刺激的なお話を聞かせてくださいましたことを深く感謝申し上げます。大井先生, 本当にどうもありがとうございました。

資料

- 1 Frances Wright (1795–1852), *Views of Society and Manners in America* (1821)
 “nauseous flattery” (James Fenimore Cooper)
 Frances Trollope (1779–1863), *Domestic Manners of the Americans* (1832)
 “‘Trollopize’ became a verb that meant ‘to abuse the American nation’.” (Sara Wheeler)
- 2 There existed a country consecrated to freedom, in which men might wake to the full knowledge and full exercise of his powers. To see that country was, now at the age of sixteen, her fixed but secret determination. (qtd. in Mullen 34)
- 3 Those principles [laid down in American government] had indeed so warmed my own feelings, as to have influenced my perceptions. During my first visit to America, I seemed to hear and see the declaration of independence everywhere. . . . my own enthusiasm doubtless conspired to throw a Claud-Lorraine tint over a country which bore the name of the Republic. (*Reason* 30)
- 4 The history of this people seemed to declare that they were brave, high-minded, and animated with the soul of liberty; their institutions, that they were enlightened; their laws, that they were humane; and their policy, that they were peaceful, and kept good faith. (*Views* 63)/A people who have bled together for liberty, who equally appreciate and equally enjoy that liberty which their own blood or that of their fathers has purchased, who feel, too, that the liberty which they love has found her last asylum on their shores—such a people are bound together by ties of amity and citizenship far beyond what is usual in national communities. (*Views* 208)/It is singular to look round upon a country where the dreams of sages, smiled at as *utopian*, seem distinctly realized. (*Views* 188; emphasis added)
- 5 I own that as regards the southern states I have ever felt a secret reluctance to visit their territory. The sight of slavery is revolting everywhere, but to inhale the impure breath of its pestilence in the fee winds of America is odious beyond all that the imagination can conceive. (*Views* 267)
- 6 May they [the children of liberty] return with fresh ardor to the glorious work which they formerly encountered with so much success—in one word, may they realize the conviction lately expressed to me by their venerable President that “the day is not very far distant when a slave will not be found in America!” (*Views* 270)

- 7 It appears superfluous, in proposing a plan for the general abolition of slavery from the United States, to observe upon the immensity of the evil, and the gloomy prospect of dangers it presents to the American people—disunion, bloodshed, servile wars of determination, horrible in their nature and consequences, and disgraceful in the eyes of the civilized world. (*Plan 3*)
- 8 At the age of eighty-two, with one foot in the grave, and the other uplifted to follow it, I do not permit myself to take part in any new enterprises. . . . The abolition of the evil is not impossible; it ought never to be despaired of. Every plan should be adopted, every experiment tried, which may do something towards its ultimate object. You are young, dear Madam, and have powers of mind which may do much in exciting others in this arduous task.” (qtd. in Brodie 463)
- 9 Nashoba would be successful only if its residents *departed* from the premises as expeditiously as possible. . . . In this original plan, Nashoba was simply a means to perfect Wright’s true utopia—the United States.” (Bederman 448; emphasis in original)
- 10 [W]hile we endeavor to undermine the slavery of colour existing in the North American Republic, we essay equally to destroy the slavery of mind now reigning there as in other countries.” (Marshall, Vol.I 170)
- 11 One glance sufficed to convince me that every idea I had formed of the place was as far as possible from the truth. Desolation was the only feeling—the only word that presented itself.” (*Manners*, Vintage ed. 27)
- 12 I never beheld a scene so utterly desolate at the entrance of the Mississippi. Had Dante seen it, he might have drawn images of another Bolgia from its horrors. One only object rears itself above the eddying waters; this is the mast of a vessel long since wrecked in attempting to cross the bar, and it still stands, a dismal witness of the destruction that has been, and a boding prophet of that which is to come.” (*Manners 4*)
- 13 When we arrived at Nashoba, they were without milk, without beverage of any kind except rain water; the river Wolf being too distant to send to constantly. Wheat bread they used but sparingly, and to us the Indian corn bread was uneatable. . . . I shared her bedroom; it had no ceiling, and the floor consisted of planks laid loosely upon piles, that raised it some feet from the earth. . . . but Frances Wright stood in the midst of fall this *desolation*, with the air of a conqueror; she would say, perhaps, that she was so, since she had triumphed over all human weakness. (*Manners 28* note; emphasis added)

- 14 I hated Fanny. She had wooed me and courted me and convinced me to move my family to this wasteland, which she had entirely misrepresented. She could sacrifice her health to her bizarre utopianism, but I was a mother responsible for children. (White 178)
- 15 Yes, dear Mary, I do find the quiet of these forests and our ill-fenced cabins of rough logs more soothing to the spirit, and now no less suited to the body than the warm luxurious houses of European society. Yet that it would be so with you, or to any less broken in by enthusiastic devotion to human reform and mental liberty than our little knot of associates, I cannot judge. (Marshall, Vol.II 181)
- 16 We had heard so much of Cincinnati, its beauty, wealth, and unequalled prosperity, that when we left Memphis to go thither, we almost felt the delight of Rousseau's novice, "un voyage à faire, et Paris au bout!" [a long journey to perform with Paris at the end of it] (*Manners* 39)
- 17 [T]hough it is not very agreeable to live surrounded by herds of these unsavoury animals, it is well they are so numerous, and so active in their capacity of scavengers, for without them the streets would soon be choked up with all sorts of substances in every stage of decomposition. (*Manners* 39)
- 18 Men came into the lower tier of boxes without their coats; and I have seen shirt sleeves tucked up to the shoulder; the spitting was incessant. . . . The bearing and attitudes of the men are perfectly indescribable; the heels thrown higher than the head, the entire rear of the person presented to the audience, the whole length supported on the benches, are among the varieties that these exquisite posture-masters exhibit. (*Manners* 133–34)
- 19 The greatest difficulty in organising a family establishment in Ohio, is getting servants, or, as it is there called, "getting help," for it is more than petty treason to the Republic, to call a free citizen a *servant*. (*Manners* 52; emphasis in original)
- 20 I honor the pride which makes a man unwilling to sell his personal service to a fellow creature; to come and go at the beck of another—is it not natural that there should be some unwillingness to do this? It is the last trade to which an American, man or woman, has recourse; still some must be driven to it, particularly of the latter sex, but she always assumes with you the manner of an equal. (*Views* 119)
- 21 I do not like them. I do not like their principles, I do not like their manners, I do not like their opinions. (*Manners* 404)
- 22 [I]f refinement once creeps in among them, if they once learn to cling to the

- graces, the honours, the chivalry of life, then we shall say farewell to American equality, and welcome to European fellowship one of the finest countries on the earth. (*Manners* 409)
- 23 If any woman asked for greater scope for her gifts the magazines were sharply critical. Such women were tampering with society, undermining civilization. Mary Wollstonecraft, Frances Wright and Harriet Martineau were condemned in the strongest possible language—they were read out of the sex. “They are only semi-women, mental hermaphrodites.” (Welter 172–73)
- 24 [W]ho can look without disgust and abhorrence upon such an one as Fanny Wright, with her great masculine person, her loud voice, her untasteful attire, going about unprotected, and feeling no need of protection, mingling with men in stormy debate, and standing up with bare-faced impudence to lecture to a public assembly. . . . I cannot conceive anything in the shape of a woman, more intolerably offensive and disgusting. (Catherine Beecher qtd. in Kissel 8 and Morris 249–50.)
- 25 I knew her extraordinary gift of eloquence, her almost unequalled command of words, and the wonderful power of her rich and thrilling voice . . . Her tall and majestic figure, the deep and almost solemn expression of her eyes, the simple contour of her finely formed head, unadorned, excepting by its own natural ringlets; her garment of plain white muslin, which hung around her in folds that recalled the drapery of a Grecian statue, all contributed to produce an effect, unlike anything I had ever seen before, or ever expect to see again. (*Manners* 70, 73)
- 26 There was, however, one passage from which common-sense revolted; it was one wherein she quoted that phrase of mischievous sophistry, “all men are born free and equal./This false and futile axiom, which has done, is doing, and will do so much harm to this fine country, came from Jefferson; and truly his life was a glorious commentary upon it. I pretend not to criticize his written words, but common-sense enables me to pronounce this, his favourite maxim, false. (*Manners* 71)
- 27 Yet I have heard of his name coupled with deeds which would make the sons of Europe shudder. . . . Mr. Jefferson is said to have been the father of children by almost all his numerous gang of female slaves. (*Manners* 71, 72)
- 28 However novel it may appear, I shall venture the assertion, that, until women assume the place in society which good sense and good feeling alike assign to them, human improvement must advance but feebly. . . . Let

- women stand where they may in the scale of improvement, their position decides that of the race. Are they cultivated?—so is society polished and enlightened. Are they ignorant?—so is it gross and insipid . . . (*Reason* 77)
- 29 Men will ever rise or fall to the level of the other sex; and from some causes in their conformation, we find them, however armed with power or enlightened with knowledge, still held in leading strings even by the least cultivated female. (*Reason* 88)
- 30 Think it no longer indifferent whether the mothers of the rising generation are wise or foolish. Think it no longer indifferent whether your own companions are ignorant or enlightened. Think it not indifferent whether those who are to form the opinions, sway the habits, decide the destinies, of the species—and that not through their children only, but through their lovers and husbands—are enlightened friends or capricious mistresses, efficient coadjutors or careless servants, reasoning beings or blind followers of superstition. (*Reason* 89)
- 31 I have wedded the cause of human improvement, staked it on my reputation, my fortune, and my life. (Frances Wright's gravestone inscription)
- 32 Frances Wright has remained one of American history's "untouchables"—seldom seen, or when seen, viewed slightly askew. (Kissen 11)

参考／引用文献

- Bederman, Gail. "Revisiting Nashoba: Slavery, Utopia, and Frances Wright in America, 1818–1826." *American Literary History* 17.3 (2005): 438–459.
- Brodie, Fawn M. *Thomas Jefferson: An Intimate History*. New York: Norton, 1974.
- Cappon, Lester J. ed. *The Adams-Jefferson Letters: The Complete Correspondence Between Thomas Jefferson and Abigail and John Adams*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1959.
- Cooper, James Fenimore, ed. *The Correspondence of James Fenimore Cooper*. Vol.1. New Haven: Yale UP, 1922.
- Egerton, John. *Visions of Utopia: Nashoba, Rugby, Ruskin, and the "New Communities" in Tennessee's Past*. U of Tennessee P, 1977.
- Ellis, Linda Abess. *Frances Trollope's America: Four Novels*. New York: Peter Lang, 1993.
- Gordon-Reed, Annette. *Thomas Jefferson and Sally Hemings: An American Controversy*. Charlottesville: UP of Virginia, 1997.
- Kissel, Susan. *In Common Cause: The "Conservative" Frances Trollope and the*

- “*Radical*” Frances Wright. Bowling Green: Bowling Green University Popular P, 1993.
- Marshall, Julian. *The Life and Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. London: Richard Bentley & Son, 1889.
- Meckier, Jerome. *Innocent Abroad: Charles Dickens’s American Engagements*. Lexington: UP of Kentucky, 1990.
- Morris, Celia. *Fanny Wright: Rebel in America*. 1984. Urbana: U of Illinois P, 1992.
- Mullen, Richard. *Birds of Passage: Five Englishwomen in Search of America*. London: Duck- worth, 1994.
- Neville-Sington, Pamela. *Fanny Trollope: The Life and Adventures of a Clever Woman*. 1997. London: Penguin, 1998.
- Safire, William. *Scandal monger: A Novel*. Chicago: Harcourt, 2000.
- Simmons, James C. *Star-Spangled Eden: An Exploration of the American Character in the 19th Century*. New York: Carroll & Graf, 2000.
- Stanton, Elizabeth Cady, et al. *History of Woman Suffrage*. Vol.1. Rochester: Susan B. Anthony and Charles Mann, 1889. [http:// www. gutenberg.org/files/28020/28020-h/28020-h.htm](http://www.gutenberg.org/files/28020/28020-h/28020-h.htm)
- Trollope, Frances. *Domestic Manners of the Americans*. 1832. Ed. Donald Smalley. New York: Vintage, 1960.
- . *Domestic Manners of the Americans*. 1832. Ed. Pamela Neville-Sington. London: Penguin, 1997. 杉山直人訳『内側から見たアメリカ人の風習』彩流社, 2012年。
- . *The Life and Adventures of Jonathan Jefferson Whitlaw; or Scenes on the Mississippi*. Paris: Baudry’s European Library, 1836.
- Welter, Barbara. “The Cult of True Womanhood: 1820 – 1860.” *American Quarterly* 18 (1966): 151–74.
- Wheeler, Sara. *O My America: Six Women and their Second Acts in a New World*. New York: Farrar, 2013.
- White, Edmund. *Fanny: A Fiction*. New York: Harper, 2003.
- Wright, Frances. *Explanatory Notes, respecting the Nature and Objects of the Institution of Nashoba, and of the Principles upon which it is founded*. New York: Printed for Purchasers, 1830.
- . *A Plan for the Gradual Abolition of Slavery in the United States, without Danger or Loss to the Citizens of the South*. Baltimore: Benjamin Lundy, 1825.
- . *Reason, Religion, and Morals*. New York: Humanity Books, 2004.

———. *Views of Society and Manners in America*. 1821. Ed. Paul R. Baker. Cambridge: Harvard UP, 1963.

大井浩二『手紙のなかのアメリカ——《新しい共和国》の神話とイデオロギー』英宝社, 1996年。

———. 『旅人たちのアメリカ——コベット, クーパー, ディケンズ』英宝社, 2005年。

———. 「フランシス・トロロプとアメリカ奴隷制度——『ジョナサン・ジェファソン・ホイットローの生活と冒険』」田中久男監修・亀井俊介+平石貴樹編著『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア』南雲堂, 2009年: 87-102頁。

———. 「フランシス・トロロプのアメリカ体験——小説『旧世界と新世界』を読む」『人文論究』第61巻第2号(2011年9月): 89-107頁。